

## 日本ナショナリズムにおける「アメリカの影」

米原 謙

はじめに

本稿の出発点は、現代日本のナショナリズムをめぐる小さなエピソードである。従軍慰安婦の補償問題をきっかけに、一九九〇年代以後、いわゆる「歴史認識」問題が大きな政治的・思想的争点として浮上した。とくに「新しい歴史教科書をつくる会」の運動はさまざまな争点を象徴するものとなったが、このとき若者のあいだに熱狂的に受け入れられたのが、小林よしのり『新ゴーマニズム宣言SPECIAL 戦争論』（全三冊、一九九八年、二〇〇一年、二〇〇三年）である。小林自身の言及によれば、二〇〇二年の時点で『戦争

論』は七〇万部、『戦争論2』は四〇万部売れたという（『正論』二〇〇二年四月号での小林の発言）。注目すべきは、『戦争論2』が二〇〇一年の九・一一同時多発テロの叙述から始まることである。小林はそこで、「その手があったかー」と叫び、「驚くべきことに、思わず自分のなかに「反米感情」が噴き出してしまった」と告白している。つまり小林は、この事件によって自己のなかにある反米意識を自覚した。勢いの赴くところ、小林の批判は日本の伝統的保守派に向けられ、恥知らずな親米保守派は「ビンラディンのツメの垢でも煎じて飲め！」と罵倒されることになる。

小林のナショナリズムの反米への傾斜は、「つくる会」内部に大きな波紋を呼んだ。「つくる会」が開催したシン

ボジウム『戦争論2』と九・一〇テロ——日本はアメリカの保護国か』の記録(前掲『正論』)は、その様相を映しだしている。例えば八木秀次は、以下のように小林の反米主義を批判する。「私は思想と政治や外交は分けて考えるべきだと思っております。思想の上では私も反米を叫びたい衝動に駆られることがあります。しかし、政治の上では反米は選択肢たり得ない」。滑稽なことに、八木は、このような便宜主義オカシユニスムが、かれらのナシヨナリズムを根底から揺るがす危険性を孕んでいることを自覚していない。例えば慰安婦問題で、「強制」を実証する資料が見つからなかったのに謝罪を表明した「河野談話」を、「つくる会」は激しく批判してきた。外交的な配慮にもとづく政治決着が日本人の自尊心を傷つけたというのである。だが八木のいう思想と政治・外交との区別は、「河野談話」と同じ構造をもっている。八木は、対象によって基準を変え、中国や韓国に対しては政治決着を批判し、米国に対しては政治的妥協を主張している。

これはかれらのナシヨナリズムの内実を映しだしたものである。ナシヨナリズムの核心が国民的自負心だとすれば、占領時代(もっと遡ってもいいが)から現在まで、日本人の自尊心をつねに傷つけてきたのは何より米国だった。「つくる会」のナシヨナリズムは、米国によって傷つけられた

自尊心の回復を、社会主義と中国・韓国への批判によって心理的に代償したものである。

## 1 「親米ナシヨナリズム」の誕生

——徳富蘇峰を素材として

徳富蘇峰(一九六三—一九五七)は、八月一五日の玉音放送を聞いたとき徳川家康のことを想起したという。家康は小藩の大名として、信長と攻守同盟を結んで隱忍自重し、遂に天下を手に入れた。「家康をして今日に在らしめたならば、彼はあらゆる苦情、あらゆる反対に眼を瞑って、米<sup>1)</sup>国と攻守同盟を締結したのであろう」。これは『勝利者の悲哀』(二九五〇年)に述べられた臥薪嘗胆と親米ナシヨナリズムのメッセージである。

しかし敗戦の日に家康を想起したというエピソードは誇張だろう。戦争中の蘇峰は、実際の戦況をまったく知らないのに(あるいはそれゆえに)、大本営顔負けのアジびらの筆者として活躍した。玉音放送も聖戦継続の勅語ではないかと、半信半疑でラジオの前に立ったぐらいである。「鬼畜米英」のナシヨナリズムが、天皇の放送で即座に親米ナシヨナリズムに転じるわけがない。しかし蘇峰の先の述懐が真つ赤なウソとばかりは言えない。近年『徳富蘇峰終戦後日記』(全四巻、講談社)というタイトルで公刊された敗

戦直後の日録は、一九四五年八月一日から四七年七月初めまでの慷慨録である。われわれはこの記録によって、鬼畜米英のナショナリズムが親米ナショナリズムに転換する様を如実に観察できる。

「この戦争は日本が始めたのではなく、全く米英、殊にその七、八分迄は米国が主力となつて、日本に喧嘩を仕掛けて来たのである。日本も売られた喧嘩、致し方はない。このまま泣き寝入りとなれば、立つ瀬は無い。そこで乾坤一擲の場面に乗り出したのである」(『終戦後日記』I、六九頁、一九四五年九月二日)。これは「大東亜戦争」に対する蘇峰の一貫した見方である。要するに、日本は追いつめられてやむを得ず「自衛」の戦争をしたにすぎない。戦争にいたる過程も、「欧米の弟子」としてその後を追つたもので、いわば「烏が鶉の真似」をして溺れたのは「笑止千万」だが、だからといって日本を戦争犯罪人として裁くのは「大泥坊が巾着切や線香泥棒を裁く」に等しい(『終戦後日記』III、二一〇～二一一頁)。

占領軍への敵意を隠さなかつた蘇峰とは異なつて、「国体護持」を至上命令と考えた昭和天皇と統治エリートたちは、マッカーサーを中心とする占領当局に協力することによって、その影響力を保持するというしたたかな戦略をとつた。米国も、天皇を利用することで占領統治をスムー

ズに遂行する道を選んだ。その結果、実現したのが「天皇制民主主義」(ジョン・ダワー『敗北を抱きしめて』)と評される日米合作の政治体制だった。

蘇峰は米国にすり寄つていくかのような昭和天皇の態度を手厳しく批判している。とくに退位もせず、「召喚」のような形でマッカーサーを訪問し、例の屈從的な写真公表したことは、明治末期以来、「皇室中心主義」を呼号してきた蘇峰を激怒させた。『終戦後日記』では自分が米国嫌いであることを公言している。「予は十二、三歳頃から、どうもアメリカが、予の頭の上を蔽う一の黒雲の如く覚えた」(IV、二六九頁)。熊本洋学校でジェーンズに習つた時から老年になるまで、ずっと「反アメリカ」で通してきつたという。あまりに誇張されているが、第一次大戦後、米国とソ連の影響が強くなつたとき、かれは日本の「米化」と「赤化」を警戒する声を上げていた。占領下でも、「癩に触るのは、日本米化の一点」と何度も書いている(同上、二七一頁)。

これほどの米国嫌いが、なぜ日米同盟を提唱することになるのか? いうまでもなく冷戦の結果である。蘇峰が冷戦をはつきり意識したのは一九四六年五月頃だと思われる。この年の初めに野坂参三が帰国し、山川均の民主人民戦線の提唱などが(まだ二面しかない)新聞紙上で大きく取りあ

げられていた。蘇峰が以下のように書いたのは五月二〇日だった。「要するに今日の日本は、既に事実には、米ソ二大勢力の争地となっている。米国は日本を米化せんと欲し、ソ連は日本をソ化せんと欲している」(Ⅱ、二九七頁)。事情がこのように認識された以上、「やむを得ざれば、ソ連よりも米国と共にせよ」という結論になるのは当然だろう。米国のほうが理想的だからではなく、ソ連に比べれば「辛抱」できるからである。

蘇峰が明確に「日米同盟」という言葉を使って、親米ナショナリズムの立場を闡明にするのはその四か月後の九月一〇日である。「ソ連に与するか、米英に与するか、二者の一を択ばねばならぬ。有体にいえば、何れも好まじき縁組ではない。唯だ何れが比較的辛抱できるかという問題である。予は一も二もなく、今日の場合は、ソ連と手を取って、日本を共産国になすに比ぶれば、アングロ・サクソンと提携して、所謂議院政治国となすの外あるまいと思ふ」(Ⅲ、二九九頁)。かれはこの文章のすぐ後で徳川家康に言及し、冒頭で引いた『勝利者の悲哀』と同趣旨のことを述べている。玉音放送直後に家康を想起したというのはウソあるいは誇張で、実は一九四六年九月一〇日のことだったのである。以上によって、われわれは「嫌米派」によって提唱された親米ナショナリズムの誕生に立ち合ったこと

になる。

かくて日本の保守勢力は昨日の敵である米国と和解し、「親米」になることによってナショナリズムの担い手になる資格を失った。わたしは先に「親米ナショナリズム」という語を使ったが、これは実はほとんど形容矛盾である。ナショナリズムとは国民的自尊心の謂いである。第二次大戦後(もつと遡れば日露戦後)において、日本人の国民的自尊心をもつとも傷つけた相手は何より米国だった。反米ナショナリズムはあるが、親米ナショナリズムはほとんど不可能である。それは米国によって傷つけられた自尊心を、中国や韓国に対する攻撃性で代償するにすぎない。

第二次大戦後のナショナリズムは、したがって「革新ナショナリズム」の形を取った。全面講和論や六〇年安保の例を挙げるだけで、そのことが納得できるだろう。むしろ革新側の反米主義という性格が強く、米国への心理的甘えが内在している。佐伯彰一は「アメリカは、外にある他国であると同時に、(中略)ほくらの内側深く入りこんでいる」と書いているが、この指摘にならえば、革新ナショナリズムは「内なるアメリカ」を十分対象化しないまま「反米」を叫んだといえるだろう。



## 2 親米ナショナリストの苦衷——江藤淳の場合

江藤淳（一九三二—一九九九）は、一九六二年九月から約二年間、米国東部の名門大学プリンストンに滞在した。最初の一年間はロックフェラー財団研究員という資格で、後半の一年は教員として日本文学史を講じた。いうまでもなくこの時期の日本は高度経済成長期にあり、とくに東京はオリンピック開催準備のために、江藤の留守中に大規模に変容した。その後の江藤の思想的歩みは、この米国体験が抜きに考えられないだろう。日米にはまだ大きな経済格差があり、外貨持ち出し制限五〇〇ドルの時代で、東部とはいえ、日本人に対する差別意識はまだ残像が消えていなかったはずである（日本人移民に対する差別を最終的に撤去した新移民法の制定は、一九六五年である<sup>3</sup>）。

帰国直後に書いた「アメリカと私」にはいくつかの興味深い叙述がある<sup>4</sup>。江藤が滞在したのは、南部で黒人の公民権運動が盛んになりつつあったときで、プリンストンでも南部出身者と北部出身者のあいだに微妙な心理的葛藤があったらしい。江藤は南北戦争における南部の敗北に言及して、南部諸州民は経済発展と引き換えに「誇り高い南部のウェイ・オブ・ライフの無残な敗北」を味わったと指摘

する（五二頁以下）。そして日米戦争を南北戦争と比定しながら、米国側が真珠湾奇襲を予知していたとする見解を根拠に、それを「倫理的に許すべからざる卑劣な行為」とする米国人の見解に強く反発している。さらに南部が敗戦にもかかわらずその「ウェイ・オブ・ライフ」を維持したのに対して、ペリー来航以来、日本人は「自分の手で自分のウェイ・オブ・ライフを破壊」してきたと、そのアイデンティティ喪失を嘆いた。

江藤が借りたアパートの家主は成功したイタリア人移民の子孫だった。江藤夫妻が交際した医師ランポーナも父は貧しいイタリア人移民で、アイルランド移民の女性と結婚した。江藤は、この夫妻や家族の葛藤を窺い知って、米国社会で成功するためにこのイタリア系米国人が支払った代価を推し測り、「母親を捨て、母親によって象徴される「イタリア人」を裏切ったという罪悪感」と表現している（七一頁以下）。移民たちは父祖の価値観を捨てて米国に同化し、アイデンティティ喪失を代償に米国人として認知された、江藤は考えた。

米国との葛藤をアイデンティティの側面から考察して母性の喪失と捉えたのはエリクソンの影響であり、数年後に書かれる『成熟と喪失——母の崩壊<sup>5</sup>』（一九六七年）を予告している。江藤は『成熟と喪失』で、小島信夫・遠藤

周作・庄野潤三らいわゆる「第三の新人」の作品を分析した。一般化していえば、近代日本において、青年が社会の階梯を登り「成功」することは、自己の育った環境を捨てることであり、つまり母によって表象される文化から離脱することである。江藤によれば、左翼的な傾向が強かった戦後派の文学が、「父」との関係で自己を規定したので対して、「第三の新人」たちは「母」への密着（一四頁）とその喪失をテーマにしたという。

しかし江藤が母性の喪失を論じたとき、あきらかにこれは父性の不在を強く意識していた。「近代日本の社会では世代の交替につれて必然的に「父」のイメージが稀薄化されて行く。その背後に作用しているのは、母とともに父親を「恥ずかしい」ものに思った息子が、成長して妻と息子に「恥ずかし」く思われる「父」になる、という心理的メカニズムである」（六八頁）。父性の不在は、父が家族の生活のために外で働いているという事情だけによるのではない。現実の「父」の背後に、模範とすべき偉大な「父」が潜在しているからである。つまり江藤の指摘にしたがえば、父を恥じる感覚は「他人」の眼を意識するためだが、その「他人」とは「西洋人」、もっと端的には米国の存在である。

武士階級が支配した時代には日本でも父性原理が支配的だったと、江藤は考えている。しかし「日本の「近代」が

この父性原理をつき崩し、敗戦がついにそれを根こそぎにしたとき、新しい騎馬民族が別種の父性原理をたずさえて、太平洋の彼方から出現した」（一四七頁）。小島信夫『抱擁家族』の主人公は、米国留学の経験があるモダンな生活者という設定になっている。妻の時子はふとしたことで駐留米兵のジョージと密通するが、江藤はそれを以下のように解説する。「時子にとってジョージを理解することは不要でなければ無意味である。彼はただ「近代」の象徴であり、青春、幸福、あるいは美しい王子等々でありさえすればよい」（六三頁）。時子の夫である俊介がジョージの責任を感ずる理由がないと述べて、俊介をたじろがせる。この場面について、江藤は「この「近代」の象徴の背後から「国家」という強い「父」のイメージが顔をのぞかせた」（六六頁）と評している。つまり江藤は、米国の庇護下にある敗戦後の日本は自らの父性を喪失し、米国という「父」に従順なままだと糾弾したのである。しかも産業化Ⅱ高度成長Ⅱ都市化は、日本人の母性的なるものを根こぎにしまった。「今や日本人には「父」もいなければ「母」もない」（二四九頁）というわけである。

遠藤周作の作品を素材にした部分では、江藤は以下のよ

た。それまで日本人の「父性原理の中核をかたちづくっていた君主は、(中略)「父」の上に在る「父」として出現した背の高い異邦人の傍らに立って一言も発しなかった、(中略)われわれはどこかに「ウソ」を感じながらこの新しい異邦人である「父」の強制する世界像をうけいれ、どこにかすかな痛みを覚えながら「母」を、つまりわれわれが慣れ親しんで来た生活の価値を否定した」(一七三―一七四頁)。いうまでもなく、江藤はここでマッカーサーと昭和天皇が並んで撮った写真を想起し、米国の權威に服従し、経済発展に自足することで、自らの「国家」を喪失した日本人を糾弾している。

現代の読者には、江藤の分析が米国の影響を実像以上に拡大しているように映るかもしれない。しかし江藤が苛立つのはまさにこのことである。つまり江藤からみれば、戦後の日本人は米国的価値を内面化してしまつたことに無自覚なために、アイデンティティを喪失した。蘇峰風に表現すれば、日本人は「米化」されてしまったのである。

日本に対する以上のような自画像が、どのような政治的表現をとるかは容易に想像できるだろう。「ごっこ」の世界が終つたとき(一九七〇年)で江藤は、日本人の「意識の尖端」につねに「米国」が付着していると指摘する。つまり「意識」と「現実」とのあいだに、つねに「米国」が

介在しているため、日本人は「現実」を体験することがなく、「ごっこ」の世界で生きている。「ごっこ」の世界を捨てて「自己回復」するにはどうしたらよいか。理窟は単純である。米国の庇護を拒否すればよい。しかし戦後日本のナショナリストは、常にここで根本的な二律背反に陥る。「自己回復を実現するためには「米国」の後退を求めなければならず、安全保障のためにはその現存を求めなければならぬ<sup>6)</sup>」。安保条約の廃棄は日米関係を決定的に危機に陥れるので、政治的には禁句である。江藤はこのことを知悉したうえで、「安保条約の發展的解消」を提議する。「もし米国が日本の提案に同意し、経済面における日本の譲歩と、軍事面における米国の譲歩によって、新しい同盟関係が成立するとすれば<sup>7)</sup>」、日本人の国民的自負心は満たされ「ごっこ」の世界も終ると、江藤はいう。

しかし江藤の読者は、ここで思わず苦笑せずにはいられないだろう。江藤が説いた「もし」の想定は、かれ自身が糾弾した「ごっこ」の世界<sup>8)</sup>を改変する現実的提案とはみなしがたいからである。かれのいう「もし」の実現が容易ではないからこそ、保守派は「親米ナショナリズム」という形容矛盾に自足し、革新派は米国への心理的甘えのなかで「反米」を唱えるという「ごっこ」の世界<sup>9)</sup>が生じた。根本の問題は何も解決されていない。江藤はここで堂々巡

りをして、自己満足しているにすぎない。

江藤は七〇年代末から占領期の研究を本格化し、憲法の制定過程やGHQによる検閲を告発した。そして戦後の「民主主義」は米国による日本統治の一環だったにもかかわらず、多くの知識人がそのような認識をもたないまま、米国から強制された価値観を普遍的なものとして謳歌したと批判した。米国占領によってもたらされた価値観が占領終了後もその「拘束」力を持続したことについて、江藤は戦後教育の影響を強調している。しかし米国の占領政治に対する修正が明確に企図されたのは、一九五〇年代の鳩山・岸内閣時代であり、これに対抗する革新勢力の側では、米軍基地や安保条約をめぐる反米のエネルギーが最高潮に達した。戦後政治をふり返ったとき、保守と革新の両側で米国からの自立が模索されたこの時期こそ、「ごっこ」の世界」と決別するチャンスだったことがわかる。責任は戦後教育や戦後進歩主義にあるのではない。それは保守と革新がすくみ合った五五年体制のなかで構造化されたものである。

江藤の議論の特徴は、アメリカの庇護のもとに、あるいはアメリカと共謀して戦後体制を築いた戦後の統治エリートに対して、かれが口をつぐむか、あるいはむしろ評価していることである。吉田茂を典型とする統治エリートたち

は、「国体護持」のために、アメリカと積極的に妥協し、その力を借りることで戦後政治体制を構築した。「民主主義」の理念（理想）を根拠に、吉田路線の現実主義を批判した左翼は、江藤の憎しみと軽侮の対象だが、吉田らは、敗戦にもかかわらず、連合国の対等な交渉相手として、したたかに自己のアイデンティティを保持したと認識されている。したがって江藤の批判は、吉田の計算されたマキャベリズムを「ごっこ」の世界」に変えたものに向かうしかなかった。

反米の契機を内在しながら、明確な反米的態度をとらず、昭和天皇や統治エリートの米国との妥協を容認するという姿勢は、その後の江藤に一貫している。一九七〇年代末から八〇年代に、日本経済がふたつのオイルショックからいち早く立ち直って「経済大国」としてプレゼンスを高めたとき、米国経済は財政と貿易のふたつの赤字による不振で苦しんでいた。日米の従来の関係があたかも逆転したかの様相を呈し、軍事力をのぞけば、日本があたかも米国と同等以上の実力があるかのような幻想がうまれた。日本はちようど中曽根内閣時代にあたり、その国際的なパフォーマンスもそうした自負心を国民のあいだに広めた。

江藤がこの時期に出した『日米戦争は終わっていない』（ネスコ、一九八六年）や『断固「NO」と言える日本』（石原

慎太郎との共著、光文社、一九九一年）は、あきらかにこの時代の日本に広く瀰漫した自信と自己満足に裏づけられている。これらの著書のタイトルは刺激的で、いかにも反米的なニュアンスがあるが、半導体技術における日本の優位などの指摘をのぞけば、日米関係の認識は従来の枠からはずれていない。『断固「NO」と言える日本』の末尾で、江藤がこの本のタイトルは『断固尊敬を求める日本』がいと述べているのは、かれの意図を明示している。要するに江藤の要求の核心は、米国と協調しながら、日本の国家的自負心を満足させることであり、その二つが整合しないところに、かれの苛立ちの根源が存在するのである。

おわりに

本稿のモチーフは「はじめに」で述べた。小林よしのり『戦争論2』の反米ナショナリズムへの傾斜と、それが醸成した「つくる会」の内部分裂は、日本のナショナリズムに内在するアムビヴァレンスが顕在化したものである。「つくる会」と近い関係だった安倍晋三は、首相就任後、日米安保第一主義をとり、靖国参拜問題に口をつぐんだまま中国・韓国との関係修復に動いた。しかしA級戦犯についての認識を問われて、サンフランシスコ講和条約に東京

裁判を受諾すると書いてあると、苦しげに答えねばならなかった。慰安婦問題にかかわる「河野談話」や「村山談話」についての姿勢でも、首相就任前の姿勢を修正するしかなかったが、その曖昧な姿勢は、一方ではかれの支持者を失望させ、他方では米国紙にたたかれて、米国やカナダの議会で慰安婦への謝罪要求が可決する事態になった。拉致問題や慰安婦問題で安倍が見せた強硬な姿勢は、所詮は国内消費用でしかなく、それはかれの外交政策での手足を縛っただけだった。

二〇世紀日本のナショナリズムにとって、米国はもつとも「重要な他者」(C・テイラー)であり続けた。米国は依存と反抗の対象であり、憧憬と敵意が入り混じった「父」である。日本人は、この「父」から、自己にふさわしい「認知」(recognition)を受けていないという不満を持ち続けている。

注

- (1) 『徳富蘇峰集』(近代日本思想大系8、筑摩書房、一九七八年)五二二頁
- (2) 佐伯彰一『内なるアメリカ・外なるアメリカ』(新潮社、一九七一年)二八頁
- (3) 若槻泰雄『排日の歴史』(中公新書、一九七二年)九

頁を参照。

(4) 「アメリカと私」は『江藤淳著作集』第四卷（講談社）による。

(5) 『成熟と喪失』の引用は一九八八年の新装版（河出書房新社）による。

(6) 『一九四六年憲法——その拘束』（文藝春秋、一九八〇年）一三九頁

(7) 同上書、一四七〜一四八頁。

(8) 江藤淳と石川好の対談「アメリカは二つある」（『文藝春秋』一九九〇年八月）で、石川は江藤の立場を以下のよう  
に喩えて、江藤の同意を得ている。「開国で国をレイプ  
された、今度は検閲で言葉もレイプされた、レイプに甘ん  
じている日本人が気にくわない。比喩的にいえば、日米関  
係を自立した国家・個人の対等な恋愛感情に高めた」（  
二二四頁）。阿川尚之『アメリカが見つかりましたか』戦  
後篇（都市出版、二〇〇二年）のように、江藤の立場を  
「反米」と評する論者もいるが、江藤の批判の対象は米国  
自体ではなく、米国に屈従する日本人に向けられているこ  
とを忘れてはならない。

(9) 首相になる以前に刊行された『安倍晋三対論集』（P  
HP研究所、二〇〇六年）には、安倍の論文一本と、二二の  
対談が掲載されている。その初出誌紙は『産経新聞』  
『Voice』、『諸君』、『正論』、『対談の相手は経済人が比較

的多いなかで、櫻井よしこが目立つ（四回）。

付言 本稿は、二〇〇八年度研究会でのわたしの報告原稿の  
うち、日露戦後から一九四五年までを論じた前半部分を削  
除し、残りの部分に若干の修正・削除をしたものである。

（大阪大学教授）